

NJ素流協 News

令和5年12月10日

第227号

令和5年12月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6（農林会館5階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <https://www.soryukyo.or.jp>

特集 1

NJ素流協 令和5年度

先進地視察研修を実施 in 茨城県

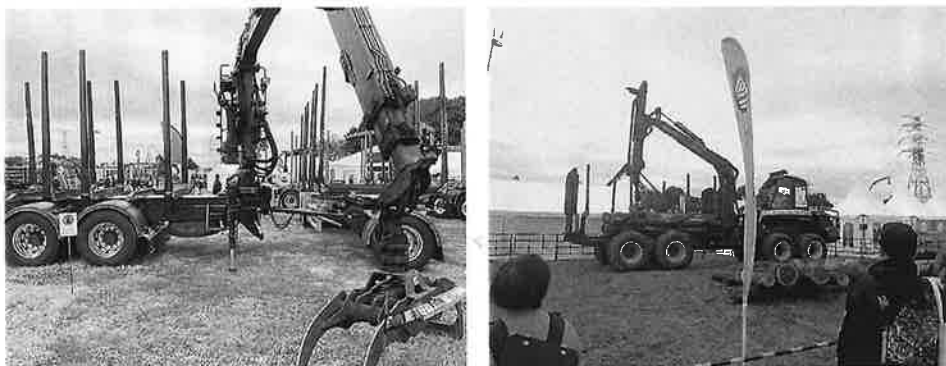
〜 4年ぶりに組合員さんたちと視察へ！ 〜

ブースに展示されていた。

NJ素流協では、組合員の知識向上を図るため先進地視察研修を開催している。4年ぶりとなる今回は、11月12日〜14日の3日間、茨城県ひたちなか市で開催された「2023森林・林業・環境機械展示実演会」を中心に4カ所訪問した。参加者は組合員17名、素流協役職員等8名、合計25名の参加であった。

視察① 2023森林・林業・環境機械展示実演会

日立建機日本株式会社のブースにおいて、林業機械展セミナーが開催され、その中で、NJ素流協鈴木理事長が「国産材時代を迎えた日本林業〜高性能林業機械を活かして〜」と題し講演を行った。ブースには50名ほどの参加があり、大盛況であった。また、機械展会場にはNJ素流協の組合員・賛助会員、東北地区原木トラック運送協議会が所有する林業機械等が、各メーカー・代理店



林業機械や原木トラックなど多くのマシンが集結。組合員さんが所有しているものも…

視察② 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 林木育種

センター・森林バイオ研究センター 林木育種センターは、遺伝的に優れた特性を持つ林業用種苗の普及に貢献するため、これまでに約2400の優良品種を開発し地域の気候、樹種等に応じた林木育種に取り組んでいる。また、森林バイオ研究センターは、先端技術を用いた育種技術の開発を行っており、中でもマツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発は、国際的にも先進的林木育種機関の一角を担っているとのこと。

● マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発

開発はまず、激害地から生き残ったマツから候補を選抜し、苗木を作ることから始まる。その苗木にマツノザイセンチュウを人工接種し抵抗性の検査を行い、接種後も枯れることがなかった「健全木」が抵抗性品種（原種）となる。さし木等により増殖した原種（クローン）を用いて各都道府県の採取園で苗木の生産が行われているとのこと。抵抗性品種同士の交配による第2世代品種も開発され、令和4年度末には590品

種となっている。

● 偕楽園から移植した樹木(ウメ)

国内唯一の林木ジーンバンク事業の実施機関であり、林木遺伝資源については、利用上の重要度や保存の必要性・優先度を総合的に勘案して探索・収集を行い、種子や穂木から増殖した成体(個体)あるいは種子・花粉・DNAとして保存している。その中で、「偕楽園」の梅の木は造園の際に植えられた原種を残すため、ジーンバンク事業が行われ梅林が育てられている。今では100品種、3千本が庭園にあるという。

視察③ FIT JAPAN合同会社

FIT JAPAN合同会社は、茨城県久慈郡大子町にあり、造林事業・素材生産事業・土木事業・再生可能エネルギー事業を展開している。今回は、高萩市大能にある山林での間伐作業現場を視察した。間伐面積4.19ha、間伐率は30%、間伐材積は400m³、低質材はバイオマス燃料材になるとのこと。作業は4名1班で実施していた。

また、茨城県高萩市といえば「徳

川の森」だ。作業現場から近いことから、同社社長の藤田友晴氏よりご案内いただいた。手入れが行き届いたスギ・ヒノキ林が広がり、森林経営計画による伐採・植林が一目でわかる広大な面積の森であった。植林後60年以上のもので、かつ厳選された材は、「徳川材」として特別に「葵の紋」の焼き入れが施され、国指定史跡等に使われているとのこと。

視察④ 大子町役場新庁舎(純木造)を視察

● 新庁舎建設に至る経緯について

令和元年10月の東日本台風の影響により、町の中心エリアが水害で甚大な被害を受け役場の機能が停止し復旧に時間を要したことから、防災拠点の役割を強固にするため高台へ移転となった。地域産業の振興と全国に向けて茨城県産材・大子町をアピールすべく「純木造」の新庁舎を建設するに至った。

● 新庁舎の構造について

庁舎の施工にも工夫がされていた。一般的な筋交工法では構造の壁量と、役場庁舎としての空間を確保するこ

とが難しいことから、上部へ伸びる長方杖材を柱に接合することで、構造耐力と空間を補填している。一見すると、和傘の構造によく似ていた。柱(柄竹)・長尺方杖・筋違(小骨・手元クロ)・トラス下弦材(中節・親骨)と天井に向かい末広がりになり、吹き抜けがブリッジ状に見える構造となっている。



庁舎入口付近

また、屋根は「軒」施工され、日差しにもなり雨に濡れずに入庁できる配慮された構造となっていた。また、大子町の特産品である「大子漆」「八溝杉」「大子那須楮を原料とした本美濃紙」が本棚や案内カウンターなど

細部にわたって活用されていた。

新庁舎の木材は約900m³で全て茨城県産材が使われている。柱間は2間(3600mm)のモジュールで一般流通材を利用しており、茨城県域・大子町の林業活性化の一助となるよう特注材の利用はしていない。

● 防災拠点としての機能

有事の際は役場庁舎全体が連携し対応が可能なゾーニング(区分)になっている。また、非常用発電機も設置され、停電時でも通信機能、空調、照明等の利用が72時間確保できる機能が備わっていた。



ご参加いただきありがとうございます！
皆様、お疲れ様でした！

特集2

令和5年度第1回林業講演会
後編 意見交換の部

NJ素流協は10月30日、今年度第1回目の林業講演会「実務に役立つ業界のデジタル化戦略」を盛岡市内で開催した。先月号に引き続き、第2部意見交換の内容をお伝えする。

* * * * *

〔司会〕 NJ素流協

鈴木信哉理事長

〔パネリスト〕

林野庁 森林整備部 整備課
課長 木下 仁氏

アジア航測株式会社

執行役員 国土保全コンサルタント事業部

総括技師長 寺川 仁氏

国土防災技術株式会社

取締役

事業本部長 田中 賢治氏

NJ素流協 鈴木理事長(以下鈴木)

最初に、皆さんの講演を聞いて私が疑問に思ったことを聞いていきたいと思います。まず木下さん、山の

地籍調査も地方自治体で進んでいるところとそうでないところで差があります。3県でオープンデータ化の取り組みを試行しているのとではありますが、他の県で、取り組みへのやる気が少ないところが出てきたら林野庁として指導はするのですか？



NJ素流協 鈴木 信哉理事長

林野庁 木下氏(以下 木下)

地籍調査はそれぞれということで確かに都道府県ごとに温度差はあるかと思えます。理事長が国有林の総括だった時代、国有林GISを入れるという話が立ち上がりました。当時、私としても、国がある程度データを整備して国有林の仕様が全国の様になるのが良いのではないかと思っていました。都道府県が先行している状態であつ、当時はデータ

形式やGISソフトもバラバラでしたので統一できなかったのだと思います。今回、オープンデータという形の中で標準化するところまで進みました。森林計画業務の中でデータ整備をしているので、計画業務自体は地方に移行している実情上、強制するのはしくみとして中々難しいです。ただ、林野庁としては、標準化のやり方やそのための支援制度も含めて、都道府県への指導をしております。今後このように進めていこうと思っています。



林野庁 木下 仁氏

鈴木 導入したところから順番に、半年ぐらいのペースで公表するようにな、取り組みを促す施策もお願いしたいと思います。では、寺川さんに伺います。岩手県有林の立木材積と出材材積の差について調べたという

話でしたが、真面目に全て造材搬出する業者と、そうでない業者がいると思います。同じような林分でも、業者による比較表を出さないと、「デジタルで調査したものが正しいかどうか？」の検証にならない気がするのですがいかがでしょうか。

アジア航測 寺川氏(以下 寺川)

そうですね。今回は3例検証しましたが、同じような条件で出材の仕方を変えたらどう違うのかという見方は面白いと感じます。3つ目の事例は、現場にチップを持ってきていたので立木材積に対する出材材積の比率が98%とかなり高く、その他は60〜70%と、まさに採材の仕方だと思えます。これがレーザ計測の正確さと直接結びつかない、ということはあるかもしれませんが、レーザ計測で出したデータと出材量の関係はどうなのか？ということを感じたのか？というところを、データをつかむにはこういったデータをどんどん積み重ねていくことが必要だと思えます。そのためにも様々なパターンのデータを集めていきたいです。

鈴木 基本的に、真面目に造材・搬出して、出ている人が「出なかった」と言う事例は調査が間違っていることが多いです。逆に「多く出材できた」という事例は大声で話さないので、出てくる話というのは儲からなかった事例になります(笑)。そういった人間の行動も踏まえつつ科学的データの整備をぜひ進めていただきたいです。

寺川 その通りだと思います。

鈴木 それでは次に田中さんに伺います。最近の大雨の影響で崩れた森林の話の中で、森林の手入れをしないと山が崩れる危険性があるのとこのでしたが、そういったデータは整備していますか。

国土防災技術 田中氏(以下 田中)

整備したいところではありませんが、あまりにも量的に少ないというところ、どのくらいの深さまで根が繋がっているか、垂直根なのか水平根なのかといった議論がされていたという経緯があり、それがまとまらずに現在に至っています。ですので、中々定量的になっておらず、場所によつてカテゴリー分けが出来なくなっているのが実状です。もう少し本筋を見極めた上で、データが集められるようになればさらに精度が上がると思っています。

鈴木 今、市町村ごとに防災マップがあります、山の崩れやすさなどもマップにするような事は計画にあるのでしょうか。

田中 なかなか、マップにするという事が無くて、各市町村の林分で防災的な側面を持つ山とそうでない山を広く分けることはしていますが、局部的に区分けするようなことは行っていないので、なかなか痛し痒いところがあります。

鈴木 ちなみに同業者と組んで取り組むようなことは考えておられますか？

田中 森林分野の技術者は非常に仲の良い方だと思いますのでぜひ横の連携を取ってやりたいと思います。

鈴木 ありがとうございます。寺川さん、先ほど木下課長も仰っていましたが、かつて国有林GISをやるうかという時に、各航測メーカーで

集まって基準を作ってやるうかという話をしたら、「今、各県ごとのシェア争いをしてるのでそういう話は難しいです!」と言われました。最近仲の良さ悪しな感じがどうでしょうか？

寺川 そうですね。コメントは差し控えていただきます(苦笑)。ただ、団体レベルでは、林野庁の要望を協力して一緒にやったりして、組めるところは組んでやっています。



アジア航測(株) 寺川 仁氏

集まって基準を作ってやるうかという話をしたら、「今、各県ごとのシェア争いをしてるのでそういう話は難しいです!」と言われました。最近仲の良さ悪しな感じがどうでしょうか？

寺川 分かりました。特に最近、岩手県内などでも、市町村と国有林と一緒に計測して解析している事例もあるようで、そういう場合だとスムーズ、シームレスに進むと思います。

鈴木 それでは、デジタル化の話に移りたいと思います。今回のテーマは「実務に役立つ」がポイントです。木下さんは、研究指導課長から整備課長になれましたが、「このレベルでは現場では使えないなあ」と実感するようなことはありませんか？

木下 研究開発では、講演でもお話ししたように、それぞれ研究レベル、実証レベルなど様々な開発段階があります。実証も、あるモデルだけで実証しているものと様々な場所でも実証しているものと、さらに実用レベルになると、その技術を皆さんが実際に使つて商用的に成り立つかという話になりますので、そうなるそれぞれ技術レベルが違うということがあります。ですので、開発しました!と言ってもそれが研究レベル、実証レベルであると、まだまだ現場では使えないという話になりますし、

それが色々なところで同じように使えるためには、様々な要素をクリアにして、「汎用性を持たせる」ということが一番課題だと研究指導課にいた時から感じていました。実行段階への移行にあたり、森林整備事業の中で、現場で落とし込んでいく際は、データがないと作れないので、段階に応じて色々なところで実証してもらうことが必要です。ですので、まだ使えないと毛嫌いするのではなく、様々な場所で実証を積み重ねていくことが大切だと思います。実証する時は補助事業の仕組みを使っていたとしても良いですし、林野庁もいろんな支援の仕組みを作っているかなければと思います。それと、皆さんからの要望があつて開発側も気づくことがあるので、そういうコミュニケーションをうまく取れる形が必やかと思います。

鈴木 ぜひ実務でうまくいっている事業体を紹介して、皆で勉強できるような場を作っていたらいいと思います。先進的なところは、それを先行してやることによって一定の利益が得られることが重要なポイントだと思えますのでぜひお願いしたいです。次に、寺川さんにもう一つ伺いたいのは、赤外線測定で、昔の林道などが映ると作業道作設にとっても便利なのですが、土地所有者が変わる等様々な要因で、木を植えた頃の元の道が分からないと余計な経費がかかってしまいます。こういう使い方をしてたら山の作業経費が下がるよ！といった事例などありましたらPRされてみたらどうかと思うのですがいかがでしょうか。

寺川 そうですね、古くなった道だけ整備したら綺麗な道になって経費も節約できるといった事例を集めて、資料に付け加えていけばさらに説得力が増す気がします。ありがとうございます。

鈴木 「見える」ということだけでなく、例えば、実際に使ったらこれだけコストが下がって生産性が上がったというような…

寺川 「効果も」ですね。

鈴木 そうですね、効果の具体的事例を整理していただけると良いと思います。そのために、我々も協力していきたいと思えます。それでは、田中さんにお聞きします。デジタル技術の色々な活用方法が分かりましたが、こうしたことは直接、国土防災技術さんに頼まないといけないことですか。一般の方では難しいと思つたのですがいかがでしょうか。



国土防災技術(株) 田中 賢治氏

田中 中々言いにくいところではありますけれども(笑)、今回、地下流水音に対しても、評価の仕方等、使い方が単純なように精度を上げるのが難しいところがあります。ですから、これから先広くやっていきたいと思つているので、機材についても、こういう仕組みなのかということも共有しながら…と思つています。ただ、現状においては、経費値とテクニクで見るとうちの会社が良いかな?とは思いません。

鈴木 なんとなく復旧治山なイメージが強くて、予防治山には使っていないだけのような感じに聞こえたのですがいかがでしょうか。

田中 施業を市区町村でやるという話になった時、やはりまずは、予防的に「起こらない」ことを重視してやりたいと思ひまして、今回、講演で紹介したような様々な知見で評価しています。私どもは地すべり等大規模な災害に対応してまいりましたが、発生しないに越したことはありませんので、まずは起こらないことに対して評価していきたいと思つています。

鈴木 はい、ありがとうございます。それでは現場への伝え方について、情報を都道府県・市町村経由だけで流すのか、山で仕事をしている事業者の人達に直接流すようにするのかという点については木下さん、いかがでしょうか。

木下 伝え方は色々なルートがあつて然るべきかと思ひます。当然、現

場で気づいたことやニーズが、技術を持っていての方に伝わるのが大事だと思いますし、地域でまとめて新しいスタイルを作る中で、そういった検討が進むことも必要なのだろうと思います。もう一つ言いたいことは、技術開発側もどうやって現場とつながったら良いか分からないというベクトルもあると思いますので、ここをうまくつなげなければいけないだろうと考えています。講演で森ハブのプラットフォームを紹介しましたが、例えば、個々のこんなことを改善したいというレベルから、様々な技術を使って全体でこんなことをしてみたいといった色々なニーズがあるのだろうと思います。このプラットフォームでも、誰でも情報を見つけれられる場として機能させたいと思っています。夏に開設しましたが、様々なイベントや、情報提供、地域でまとまった取組に対してコーディネート者を派遣するといった機能もこの中に作っています。様々な段階に対応した情報提供や関係構築をしていく仕組みを整備していきたいと

思っています。

鈴木 次に、寺川さん、疑問があった場合、会社でそれを受け付けるサイトや窓口など何か発信しているのでしょうか。

寺川 そうですね、形式的なことを言うと、会社のホームページに窓口がありますのでそこでも良いですし、ノースジャパンさんを通じてでも、疑問や要望があれば対応したいと思っていますので遠慮なく言っていましたらと思えばと思います。

鈴木 分かりました。最後に田中さん、講演で根の深さについてお話がありました。一般的に、10年くらい経つと、前に伐った木の根が腐り、次の木の根がうまく張らないため崩れるというような話をされていたような気がするのですが、そのあたりの研究的な解釈は今どういった具合でしょうか。

田中 現在の解釈は、根系について、B層が発達することで、根が深くまで入っていくということです。岩盤のところ根が入って止まっているということではございません。

ですから、崖錐堆積物のところだとB層がかなり発達して深部まで根が入っています。これを踏まえて丁寧に見ていかないといけないと思っています。

鈴木 わかりました。それでは、今日は「実務に役立つ業界のデジタル化戦略」ということでお話しいただきましたが、今後に向けての会社・個人としての決意や取り組みたいこと等を最後に皆さんからいただきました。と思っています。

田中 植えてあったものが枯れてその後うまくいかなかったという例を全国で見えております。そのような事例についてデータ化して、植えた後、早期に大きくして下刈り回数を減らし、獣害対策もして健全な林分にしていくということを、デジタル技術を使って会社を挙げて展開していきたいと思っていますので引き続ききよろしく願います。

寺川 今後は、森林環境譲与税や花粉症対策に貢献するために航空レーザ計測を引き続き頑張っていきたいです。今日ここに来たのは、できれば

皆さんから、立木販売と航空レーザ計測の関係といったデータを今後ともお聞かせいただきたいという思いもあつて参りました。今後ともよろしく願います。

木下 このような場をいただいてありがとうございます。デジタル化はあくまで手段ですので、これを何に使っていくか、それぞれの立場の方がどういう形で利益を抽出していくかが重要だと思います。だからこそ、他の技術も組み合わせる仕事に生かしていくことが必要になってきますので、私たち林野庁も色々な支援プロジェクトを行っていきたく思いますので方向性へのご理解とともに現場実証等へのご協力をお願いします。もう一つは、それを担う人たち、人材を確保することが重要だと思っております。業界として、若い人たちに喜んでもらえるような働く場ややりがいと一緒に考えていけたらと思います。

* * * * *

講師の皆様、ありがとうございました!!

トピックス

花粉症対策 初期集中パッケージ 〜組合員が知るべきこと〜

注目を集める令和6年度予算「新たな花粉症対策の展開と森林・林業・木材産業によるグリーン成長」は、

「花粉症対策の全体像(R5・5・30)花粉症に関する関係閣僚会議決議」に示された来年の飛散時期を見据えた対策のみならず、今後10年を視野に入れた施策を含めて花粉症解決のための道筋に基づいたものです。

来年の花粉の飛散時期が近づく中、「花粉症対策の全体像」が想定する10年の初期段階に集中して実施する対策を「花粉症対策初期集中パッケージ(R5・10・11同閣僚会議決議)」として取りまとめ、確実な実行に取り組むことが決まりました。11月20日に国会提出された花粉症対策の補正予算案は、これに基づいたものです。発生源対策の概要は次のとおりです。

発生源対策

スギ伐採が促進される！

(1)スギ人工林の伐採植え替えの促進
まず、花粉の発生源であるスギ人工林(20年生以上)を令和15年度に現行の約2割を削減するため、令和5年度中に「スギ人工林重点区域」を設定し、伐採面積を現行の5万ha/年を10年後には7万ha/年に増やして、花粉の少ない苗や他樹種への植替えを進めて、スギ人工林の減少スピードを約2倍とすることを目標にしています。

具体策は次の3つです。

- ①スギ人工林の伐採・植替えの一貫作業の推進
- ②①の作業に必要な路網整備の推進
- ③意欲ある林業経営体への森林の集約化の促進
- (2)スギ需要の拡大
スギの伐採量が増えたと素材の出口対策が必要になります。

そこで、スギ材需要の拡大を図り、

現行の1240万m³/年から1740万m³/年(40%増)に増やすこと

を目標にしています。

住宅メーカーが国産材転換に進まざるを得ない！国交省の取組みが鍵だね！

具体策は次の5つです。

- ①木材利用をしやすいとする改正建築基準法を施行(令和6年4月施行予定)
- ②令和5年度中を目処に国産材を活用した住宅に係る表示制度を構築
- ③令和5年度中を目処に住宅生産者の国産材使用状況等を公表
- ④建築物へのスギ利用の機運の醸成、住宅分野におけるスギ材への転換促進
- ⑤大規模・高効率の集成材工場、保管施設等の整備支援

(3)花粉の少ない苗木の生産拡大

植え替えを進めるには苗木が必要になります。

そこで、花粉の少ないスギ苗木の生産割合を現行の5割から10年後には9割に引き上げることを目標にしています。

造林補助が少花粉スギ・カラマツに限定↓対応遅れて供給できない県は先進他県から購入!?

具体策は次の4つです。

- ①(国研)森林研究・整備機構の原種増産施設の整備支援
- ②都道府県の採種園・採穂園の整備支援
- ③民間業者のコンテナ苗増産施設の整備支援
- ④スギ未熟種子から花粉少ない苗木を大量増産する技術開発支援
- (4)林業の生産性向上及び労働力の確保
山で働く人がいなければ目標は達成できません。そこで、林業労働者の減少対策として、意欲ある木材加工業者等による高性能林業機械の導入を促進し、他産業との連携を進めて10年後も過去の10年と同程度の生産性の向上及び現在と同程度の労働力をキープすることを目標にしています。

具体策は次の3つです。

①意欲ある木材加工業者・木材加工業者と連携した素材生産者・森林組合に対し高性能林業機械の導入支援
 ②農業・建設業等の他産業、施業適期の異なる他地域や地域起こし隊との連携促進

③外国人材の受け入れ拡大

青年部会「令和5年度第1回視察研修」を開催

当組合青年部会は令和5年11月11日、12日の2日間、福島県及び茨城県において、今年度の第1回視察研修を開催し、会員6名が参加した。

11日は、まず、福島県国見町の「道の駅国見 あつかしの郷」にある「こども木育広場 つながるくむ」を視察し、優しく、温かい木のおもちゃに囲まれた空間で、実際に親子が楽しく遊んでいる様子を見ることができた。

次に、福島県伊達市において国産材原木市場を営む南東北木材株式会社を視察した。鈴木賢二代表取締役社長に原木土場をご案内いただき、様々な樹種の原木を見ながら、価格

の付き方などについてご説明いただいた。用途をしっかりと理解して採材し、適正な評価を付けたいという熱い思いが伝わる大変勉強になるお話だった。

12日は、茨城県ひたちなか市の笠松運動公園で開催された「2023森林・林業・環境機械展示実演会」を視察し、最新の林業機械等に関する情報収集、青年部会主催の森林・林業普及啓発イベント「げんき森林（モリ）モリフェスティバル」に出展協力をいただいたメーカー・販売店との情報交換等を行った。

視察にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

**東北地区原木トラック
運送協議会と東北森林
管理局(林道PT)
合同現地検討会・工場
視察を開催**

11月1日、2日、山形県最上町の国有林で、原木輸送の大量輸送・効率化を図るため、フルトラレーラ対応の林道作設について現地検討会を東



現地検討会の様子

北森林管理局（林道技術者育成プロジェクトチーム）と合同で開催した。検討項目を4項目（林道最終地点のUターン場所、待機場所・積込み場所、林道の入り口の広さ）とし、ドローンによる空撮映像を見ながらの検討会であった。終了後は、意見交換会が行われ、林道の縦断勾配を12%以下にするなどの意見が挙げられた。

また、国有林材納入先の協和木材株式会社 新庄工場を訪問し、丸太の納入時（集積場）から工場・製品になるまでの一連の流れについて工場視察を行った。次に、効率化を図るために欠かせないフルトラレーラの架装を手掛ける新庄自動車株式会社の



協和木材(株) 新庄工場土場の様子

**N J 素流協 令和5年度
第5回理事会開催**

N J 素流協は11月20日、盛岡市内において令和5年度第5回理事会を開催いたしました。

共同販売事業取引先の追加選定、規程の一部変更等について審議・承認をいただき、上半期事業報告をはじめ他7件の報告を行いました。

林野庁若手職員 実務研修を受けて

林野庁 国有林野部管理課
人事研修班 研修係

重松 友希

11月13日～17日に、林野庁職員重松友希様が当組合の研修を受講され、体験記事を頂戴しましたのでご紹介します。

今回の研修では、ノースジャパ
ン素材流通協同組合（以下、NJ
素流協）についてと役割を学び、
取引先のバイオマス発電所やその
土場、製材工場、広葉樹の市売り
も見学させていただきました（さ
らに、組合員の方々の先進地視
察にも同行させていただきました）。
私は、東北地域の林業・木材産業
に対する知識がなかったので、見
ることも知ることがとても新鮮でし
た。一部活動と5日間の学びや感
想を簡易ながら記させていただきます
ます。

◆NJ素流協の組織・役割

NJ素流協は、組合員の伐採し
た丸太をとりまとめ、工場側が要
望する樹種や品質、量にマッチし
た丸太を計画的かつ安定的に供給
する組織である。今回研修で様々
な事業者の方と接している様子を
拝見したが、NJ素流協は川上と
川中・川下の双方と信頼関係を築
いていると感じた。生産・需給情
報を共有し実行することは難しい
が、NJ素流協は仲介して需給情
報を管理し、多様化する需要に応
えている。私がいた愛媛県では、
県森連や市場が生産現場に行き、
事業者へ需要に合わせた造材を提
案する様子をみたが、NJ素流協
がそれと異なる点は、組合員の生
産状況を管理し、工場側へ丸太の
価格交渉や速やかなクレーム対応
など、きめ細やかな調整を行って
いる点である。もし私が工場側な
ら、要求した材がちゃんと入荷し、
材に不備がある場合速やかに対応
してくれると安心して事業を続け
られる。もし私が供給側なら、搬
出した丸太に高値が付くほどやる

気が出る。そのようなやり取りを
重ねることで、工場側も供給側も
小さなことでも相談したくなる。
NJ素流協は、その小さな相談
から、工場側・供給側の状況を得
ることができる。この関係が、安
定供給に繋がっていると感じた。
また、組合員と先進地視察へ行き、
情報や知識の共有など交流を行う
ことも信頼に繋がっていると感じ
た。今回は、クレーム対応や丸太
の価格交渉の場も見てみたい。

◆工場・土場見学（株式会社ウツ
テイかわい区界バイオマス発電所、
有限会社二和木材、株式会社古里
木材物通）

最も新鮮だったのは、無人のト
ラック計量装置である。好きな時
にトラックを装置に駐車させるだ



トラック計量装置

けで積載量を計るため、トラック
運転手の働きやすさに貢献できる
と思った。

また、丸太を集積したその場で
燃料にする破砕機の様子も見学し
た。丸太を破砕機に投入すると、
運送用のトラックに直接チップが
積まれていく。職員の方々が「投
入する丸太によっては、破砕機が
止まったりする。今のオペレーター
は、一度も滞ることなく動かして
いたのでとても上手だね。」と話し
ていたのが印象的であった。



破砕機への投入の様子

◆広葉樹の市場（盛岡木材流通セ
ンター）

まず、市場いっぱい様々な樹
種の広葉樹がならんでいることに
驚いた。私が愛媛でみた市場では、
針葉樹の丸太がほとんどを占める

中で広葉樹の市場はとても小さく、樹種もケヤキやサクラしか見覚えがなかった。県森連の阿部部長から、最近の需要は、ラケットの柄の部分や、体育館の床、地元飲食店のカウンターなど、多岐にわたることを教えていただいた。活用用途だけでなく、近年のmあたり平均単価がとて高いことにも驚いた。岩手県は、広葉樹資源も豊富にあり、需要が高まる樹種や活用範囲も変化したりするため、これからは「広葉樹の市場く利用」の動向にも着目し、勉強したい。

◆安比中間土場見学

東北森林管理局と契約している委託販売の様子を見学し、現状をうかがった。いつもと違った立場から国有林事業を見ることができ、トラックが積み込みやすい山土場の作り方・配置など勉強になった。

◆終わりに

今回、様々な事業体の方々とお話しする機会をいただきました。地域の特色はそれぞれ異なるが、

日本全体の森林林業・木材産業の発展に一生懸命尽力したいと、改めて思った研修でした。お忙しい中受け入れていただいたN J素流協の皆様、気さくに話しかけていただいた組合員の皆様、疑問に丁寧に答えていただいた事業体の皆様、情報をくれた林野庁職員の方々、この研修で関わったすべての方々に感謝申し上げます。

お知らせ

組合員からの研修生を引き続き募集しています！

N J素流協が4月より受け入れていた研修生の研修が、12月末を以て終了いたします。

引き続き組合員からの研修生の受け入れを募集します。お問い合わせは、経営企画管理部までお願いいたします。

組合員の皆様へお知らせ

丸太需要が回復してきました！
次のようなことでお悩みの方はご相談を!!

- 納入先の枠が足りないのでは、どこか納められないかなあ？
- 遠くても納めたいんだけど自社トラックでは行きにくいので、緑ナンバーを紹介して欲しいんだけど？
- 丸太の品質が良すぎて、合板・集成材・一般製材ではもったいないんだけど？
- 広葉樹の用材規格、採材方法が分からないので教えて欲しいんだけど？
- 自社トラックが壊れたけど、代わりに走ってくれる緑ナンバーを紹介して欲しいんだけど？

○買った山に1本(2〜3本)だけ超優良木があるんだけど、どうしたらいいかなあ？

○短コロ、末木枝条の林地残材を誰か買って欲しくないかなあ？

○末木で杭材作る造材、伐採方法を教えて欲しいなあ？

○特別な長さの販売先があると聞いたけど、やりたいなあ？

○土日でも納入可能な工場を教えてくださいなあ？

相談窓口は営業企画部まで

電話 019-652-7227

N J素流協 年末年始休業のお知らせ

年末年始につきまして下記のとおり休業いたします。

休業期間：12月29日(金)～1月3日(水)

休業期間中はご不便・ご迷惑をおかけいたしますが何卒よろしくお願い申し上げます。

営業開始は1月4日(木)からとなります。

ちよつと気になる木の話

暗黒の林業・木材産業時代を
生きた親父世代

—光の見え始めた息子世代は
意見は合うのか?—

戦後の林業・木材産業の歴史を見つめ返せば、外材製品輸入時代に入り、真壁工法・和室の減少は、大きな痛手となった。特に、阪神淡路大震災を契機に、梁桁だけでなく、管柱も欧州産R・Wが市場を制覇することとなった。この結果、木材自給率は低下を続け、国産材暗黒時代を迎えた。

結果、膨大に、どこの市町村にも沢山あった製材工場はどうしたのか?このままでは経営できないと判断(決断)し、倒産だけでなく廃業に進んだ。当然息子さんは跡は継がないとなった。その中で、何とか生き延びようと様々な取組みをしたところは、木材産業として生き延びている。製材業から住宅建設業・木材問屋業に、製材・問屋業から機械プレカスト業に、港湾製材もN・Z・チリのラジアータ・パインを使った梱包材・製材業に、製材をやめてチップ生産業のみと様々である。中には、

土建業に転向した人もいた。

何とか製材業で生き延びようと、自有林を伐採して原木仕入コストを下げたり、自有林の管理に専念したり、外材ラミナを輸入して集成材工場に転換したり、外材広葉樹丸太を調達して別途生き残り策を模索する者もいた。もちろん需要は減ったが、残り者勝ちの化粧材に特化した工場もあった。

この時代経営者だった現在の50代後半以降の人は、本当に苦労したといえるが、自分なりに経営方針を変更して生き延びたのである。

もつと大変だったのが素材生産業であり、販売先が廃業すれば需要は激減する。原木市場へ出しても不落になり、安価で買ったたかれる。仕方なく製紙用チップに出すしかない。当然、利益は出ないので、廃業に向かうしかない。地方の農業の衰退もあり、伐採適期の冬場素材生産の兼業事業体は、林業から離れていった。

もちろん、続けていくには、立木の買入れ価格を下げなければならず、立木単価は下がり続け、山主は売らなくなった。

でも、何とか生き延びる方策を探した業者もある。高速道路・大規模開発の支障木、原木シイタケ伐採等の出稼ぎに出かける。育成途上だった民有林の造林補助金の除間伐の森林組合等の下請けに入る、国有林の直営直備の廃止に伴い、国有林の請負生産造材に入る等々である。

売り先確保のため、自ら製材工場を立ち上げた協和木材、門脇木材等もあった。こうした苦労の後、国産材時代に向かう明かりが見えてくる時代となった。

何といっても、第1次プーチン政権のロシア丸太輸出関税問題である。これを機に、合板工場が国産材に転換が始まった。南洋材の合法性証明問題もある。この時期、民間の木材業者への1/2以内国庫補助金が全国に拡大したことはベストタイミングだったといえる。

こうして、製材、合板・集成材の国産材利用大型工場化が進むこととなり、現在の国産材時代への日が差す状況となった。暗黒時代からの脱却である。親父世代の苦労を見てきた息子・従業員世代は「親父たち大変だったね」は言葉に出さなくても理解していると思

う。

しかしながら、林業・木材産業とは全く関わりなかった国・地方自治体、森林組合職員、新たに参入した若手事業体の息子世代には全く知らない過去である。「あの年寄りの親父、ものわかんなくて何なんだ」「今の機械化林業知識全く関心ないんだよな」「従業員のと全く考えてないんだよな」となる。本当は、苦労した話を聞いて、「ご苦労様でした」と感謝し、「次の時代は私たちに任せてください」となるコミュニケーションが望みである。これは林業・木材産業の知識に詳しいかどうかは全く問題ではない。

業界の不況の時に「どうしようか?」と考えるのではなく、好景気の時に「こうしよう!」と次の一手を考えるのが、本当の姿である。

最後に、「ビッグモーター事案」の時に、30代社長はダメだとある人が発言した。20代は勉強するが、30代は年上、年下も俺より下と思いいいとする。40代になってから社長の方がいいと。様々な苦労と成功・失敗体験が事業発展の鍵である。

各世代ギャップを乗り越えて、真の国産材時代への夢である。

令和5年11月分の販売実績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	13,629	110.6	125.5	10,456	142.1	108.5	24,085	122.4	117.5
カラマツ	7,214	119.8	122.9	288	63.2	77.7	7,501	115.8	120.2
アカマツ	2,453	162.3	157.2	255	299.4	124.5	2,708	169.6	153.4
その他	0	*	*	190	14.6	14.5	190	14.6	14.5
合計	23,296	117.4	127.4	11,188	121.7	97.1	34,484	118.7	115.7

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	7,451	87.6	97.3
カラマツ	7,204	152.3	248.3
アカマツ	963	52.7	38.1
その他	703	121.5	*
合計	16,321	104.4	124.6

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m ³)	製材・集成材・その他用 (m ³)	計 (m ³)	燃料用 (t)
スギ	88,170	64,102	152,272	43,722
カラマツ	40,050	1,792	41,842	33,361
アカマツ	13,854	939	14,793	14,486
その他	0	3,413	3,413	2,849
合計	142,074	70,246	212,320	94,418
目標達成率 (%)	59.2	40.1	51.2	69.9
計画量	240,000	175,000	415,000	135,000

注)*印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和5年11月の需給動向】

- 製材・集成材工場の過剰在庫の原木消費も進み、秋以降続いているスギ原木の引き合いが更に強まる。
- 合板工場のカラマツ原木も引き合いが強まる傾向にあり、当面カラマツ不足は続く。
- アカマツも青変菌の心配が無くなり、原木の引き合いは強まる傾向にある。(冬期間の引き合い続く)

耳からウロコ

キノコ生産方法JAS誕生記録

「キノコ価格デフレへの対抗戦?」

平成18年に、JASにおける品質表示基準が変更され、しいたけの栽培方法の表示が義務付けられる改正がなされた。その時の担当者の思いを記述したい。この頃、スーパーだけでなく八百屋にも中国産の菌床生しいたけが大量に販売されていた。当然、国産品より安いからである。この結果、国産菌床しいたけ、ブナシメジ、エノキタケ・ナメコ等キノコの販売単価は下がる一方であった。本来高いはずの原木しいたけも下がり傾向である。

このままでは、キノコ生産業界は、採算割れを起してしまうとの危機感で一杯であった。この時代は、国産原木乾しいたけは香港に輸出され、中華料理には欠かせない高級食材であった。

そこで、単価の高い原木しいたけの振興こそが、キノコ業界を救う途だと考えて、JASの品質表示基準制定に走るこゝととなった。担当部局に案を持ち出したが、反応は薄く、当時の事務官課長が入省同期ということだけあってももらったが、その回答は「そんなことできません。栽培方法を認めると野菜も、露地栽培、水耕栽培、ハウス栽培等明記しなくてはならなくなります。」で、当時の課長も怒っていた。しかし、あきらめきれず、委員

会には案をかけてくれることとなった。ところが、本委員会では消費者団体の委員から、食品の情報は詳しい方が消費者のためになるとの発言が、委員の皆様のご同意を得て通過することとなった(この流れにはキノコ学者先生の後押しもあったことも事実である)。

結果、原木表示のしいたけが市場に回り始めると、原木しいたけの単価は、菌床しいたけの単価を大きく上回るようになった。同時に、表示に関心が高まり、中国産菌床しいたけも日本市場から後退していったのである。そもそも菌床そのものが、日本の種菌メーカーのものではないかとの検証を始めたのも影響…。

現在は、原木しいたけ生産業者の減少や東日本大震災の影響もあり、原木しいたけの供給は、高レベルなわけではないが高価格は維持している。一方、最近感じるのには、菌床表示でも原木表示に近い品質向上物件も見られるかなという感じである。種菌の開発と菌床の中身にも進歩があるとの個人的感想である。

この話題のポイントは、限らないデフレ現象にならないためには、特上品を位置づけなければならないということである。特上がなければ、上、並の値段は安くならざるをえないのである。

1杯1500円のソバがないと駅ソバ500円は安いと感じなくなる。木材業界も特上品業者が元気に継続経営できるよう林業・木材産業の皆でのサポートが必要かな?